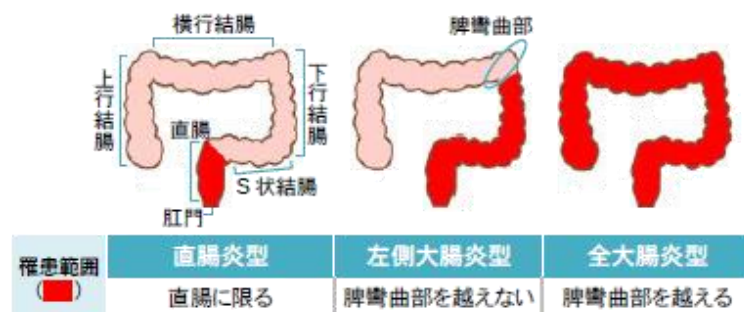


潰瘍性大腸炎は、国が定めた「指定難病」の1つで、現在、日本には、約18万人の潰瘍性大腸炎の患者さんがおり、その数は年々増加しています。今回は潰瘍性大腸炎の病態と治療法についてご紹介します。

●潰瘍性大腸炎について

潰瘍性大腸炎は、大腸の粘膜（最も内側の層）にびらんや潰瘍ができる大腸の炎症性疾患の一つで、重症化するにつれて炎症が直腸から小腸側へ連続的に広がっていきます。



潰瘍性大腸炎の罹患範囲

腸に炎症が起きる病気を「炎症性腸疾患」と言います。炎症性腸疾患には、大腸に炎症が起きる「潰瘍性大腸炎」と、小腸や大腸などあらゆる消化管に炎症が起きる「クローン病」があります。

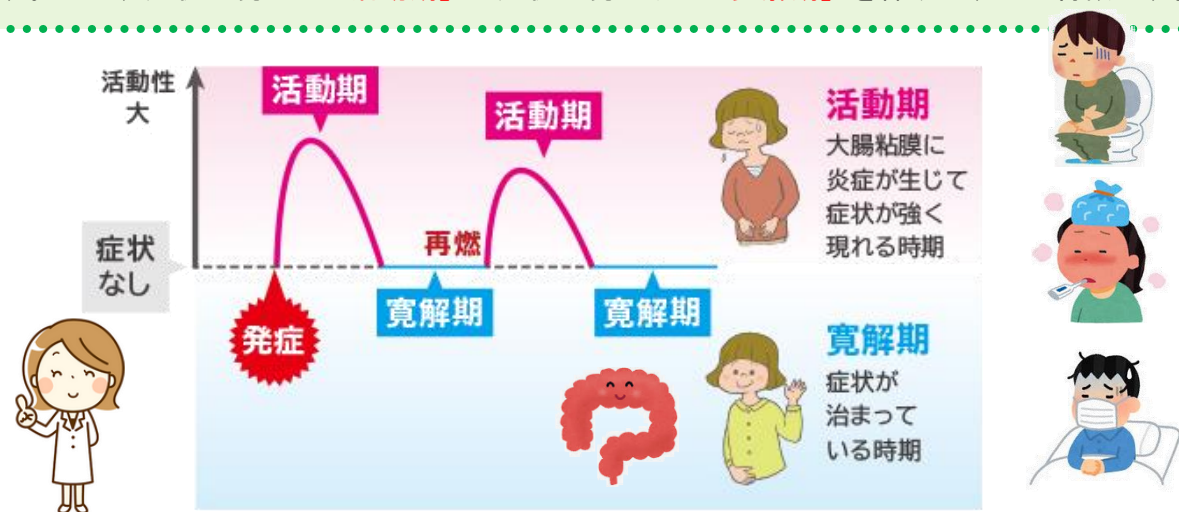
●潰瘍性大腸炎の原因

これまでに、腸内細菌の関与や、本来は外敵から身を守る免疫機構が正常に機能しない自己免疫反応の異常、あるいは食生活の変化の関与などが考えられていますが、いまだ原因は不明です。

また、潰瘍性大腸炎は家族内での発症も認められており、何らかの遺伝的因子が関与していると考えられています。現在では、遺伝的要因と食生活などの環境要因などが複雑に絡み合って発病するものと考えられています。

●潰瘍性大腸炎の症状

主な症状は下痢や粘血便、腹痛で、体重減少や発熱等の全身的症状が現れることもあります。また、症状が現れる「活動期」と症状が現れない「寛解期」を繰り返すのが特徴です。



●治療方法

原則的には薬による内科的治療が行われます。しかし、重症の場合や薬物療法が効かない場合には手術が必要となります。

薬物治療

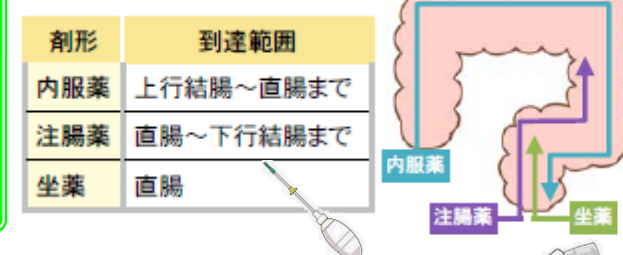
現在、潰瘍性大腸炎を完治に導く内科的治療はありませんが、腸の炎症を抑える有効な薬物治療は存在します。治療の目的は大腸粘膜の異常な炎症を抑え、症状をコントロールすることです。

潰瘍性大腸炎の薬物治療には、活動期の炎症を抑える「寛解導入療法」と寛解期を維持して活動期へ再燃するのを防ぐ「寛解維持療法」があり、重症度や病期及び罹患範囲によって薬剤や用法・用量が異なります。

活動期(寛解導入療法)		寛解期(寛解維持療法)
左側大腸炎型・全大腸炎型	直腸炎型	
軽症・中等症 5-ASA 製剤 (内服薬、注腸薬、坐薬) ステロイド (内服薬 ^{*1} 、注腸薬)	5-ASA 製剤 (内服薬、注腸薬、坐薬) ステロイド (注腸薬、坐薬)	非難治例 5-ASA 製剤 (内服薬、注腸薬、坐薬)
重症 ステロイド (注射薬) 手術を検討		
劇症 ステロイド (注射薬) 免疫抑制薬		難治例 ^{*2} 5-ASA 製剤 (内服薬、注腸薬、坐薬) 免疫抑制薬 TNFα 阻害薬
難治例 ^{*2} 免疫抑制薬 TNFα 阻害薬		

*1: 中等症で炎症が強い場合・5-ASA 製剤、ステロイド注腸薬で効果がみられない場合に併用
*2: ステロイドで改善しない場合、ステロイド減量で再燃する場合等

潰瘍性大腸炎治療薬は剤形に応じて薬剤の到達範囲が異なり、罹患範囲に応じて薬剤が選択されます。また、単剤で改善がみられない場合は内服薬と注腸薬・坐薬が併用されることがあります。



- ★ 潰瘍性大腸炎は症状が現れたり治まったりを繰り返しますが、服薬を続けることで症状を抑えた状態を維持することができます。
- ★ 症状が治まっても服薬をやめると再燃してしまうので、自己判断で薬剤を減らしたり中止しないでください。

●日常生活の注意点

寛解期では日常生活を必要以上に制限する必要はありませんが、過労やストレスが原因で再燃することもあるため、ストレスなく規則正しい生活を送るようにしましょう。

活動期では過度な運動や長期の旅行は控え、大腸に負担をかけない食生活を心がけるようにしましょう。

良いと考えられている食品

- 高エネルギー食
白米、パン、おかゆ、煮込みうどん等
- 良質のたんぱく質
白身魚、鶏肉（皮を除く）、牛肉赤身、大豆食品、卵等

気をつける食品

- 消化されにくい食物繊維
ごぼう、しいたけ、たけのこ、山菜等
- 腸管を刺激するもの
香辛料、コーヒー、アルコール類、炭酸飲料等